



Illustration by S. Maruyama

蹴球殿堂

佐山一郎

SAYAMA ICHIRO

第8号・その1
奥澤 浩
(元2級審判・栃木県社会人サッカー連盟副会長/県協会常務理事)

公式戦審判、2517試合のブルース

「な」と怒鳴って、最後には「寂しくなりますねえ」と言って握手求めてきたこともありました」

きわめつけは、キックオフ直前の光景である。奥澤が続ける。

「たまたま円陣に近寄ったときに、『今日の主審は昔から煩わしいから注意しろ、とうちの親父が言ってた。判定には文句を言うな』とキャプテンが言ってるのが聞こえてしまったんです(苦笑)」

親子2代同じ厳格なレフェリー。サッカー文化が根づいてきた証以外の何ものでもないじゃないですか、と讃嘆の声をあげたら、鳩が豆鉄砲を食ったような表情で「そうですか?」と奥澤氏。

南米のレフェリーさながらの命がけというような事態はさすがに起きなかつた。だが、ボールの行方とは無関係な動きで選手に試合の間中つきままとわれたことがあった。反則すれすれを狙ってくるからタチが悪い。後方からの疑わしい体当たりでムチ打ち症になったこともあった。

「数多くやってきましたからミスの数でも誰にも負けないということになってしまいます。選手からは随分

と文句を言われたものです。最後の(異変)に関しては今までの分のお返しかもしれないですね」

奥澤はサッカー観戦者としても大変なキャリアを有する。本誌に関しても創刊号からの全冊を保存。69年10月に行なわれたメキシコ・ワールドカップ/アジア・オセアニア一次予選の韓日戦で恐怖におののきながら日の丸を降ったこともある。対日感情の悪さだけではなく当時のソウルはコレラ患者が出て騒然としていた。その後も74年西ドイツ、78年アルゼンチン、82年スペイン大会を現地で観戦。ワールドカップ観戦のために会社を辞めたこともあった。

この一男一女の父親には勤務する会社の定年が近づいている。「あと5年弱でしょうか」と語る奥澤に、関東協会の2級審判定年時よりシヨックが少ないのでは?と当てずっぽうを言うと、ハンカチで額の汗を拭きつつの阿々大笑。たぶんその世代の男たちに多い「会社人間」とは一味も二味も違うのだろうか。審判プロ化時代に間に合わなかった。早過ぎた人、と言っ他ない。(この項つづく/文中敬称略)

JR 宇都宮駅の改札口でブレザー姿の中年男性が迎えてくれた。55歳

という年齢は医学の祖・ヒポクラテスによれば「老齢」の始まり。ところが昭和22年生まれこの人の場合はかなり例外的だ。小柄なこともあつてか身のこなしが軽快でレスポンスも速い。

駅前のホテル一階に腰を落ち着けた。こちらの訝えない冗談。「レフェリー・ユニホームで来られるかと思いましたが」にも素早い反応の笑いを返してくれる。と同時にそこには独特のナチュラルな威厳も漂う。

登場の奥澤浩は1968年3月23日に現在の4級にあたる「級外審判」となった。以後、2002年12月31日の2級審判としての定年までに公式戦審判として2517試合に

かわつた。

内訳は主審として1610、副審(線審)として873、第4審判として34試合。当の本人は「国際試合の数でならいざ知らず。それに今はもう中学生でも4級、3級を取得できる時代です」と謙遜モードだが、間違いなくギネスブック級である。

差し出された途方もない一覽表(公式戦審判 2517試合までの道のり)を前にため息が出てしまう。そして或る仮説らしきものがせりあらる。

これはあくまでも勘にしか過ぎないのですが、奥澤はサッカーが大好きじゃないのでは。孤独が保証されることによって持続力が保たれたのではないですか?

「僕もそんなふうには思っています。サッカーばかりが妻の場合はスポー



Illustration by S. Maruyama

蹴球殿堂

佐山一郎
SAYAMA ICHIRO
第8号・その2
奥澤 浩
(元2級審判・栃木県社会人サッカー連盟副会長/県協会常務理事)

公式戦審判、2517試合のブルース

(承前)

否して辞表を出すなど仕事上での波乱があった。

「最初の退社は、3カ月連続出勤を強いられるような会社でしたからむしろラッキーなこととして受け止められました」と奥澤は述べた。

天はしかし奥澤に味方しない。79年、保留。80年、不合格…。

「日本一の二級審判員」と言えは聞こえは良いが、等級制度は冷酷な一面を併せ持つ。聞きづらいことをあえて聞く気になったのは、直観が働いたからである。

派(学) 関ですか？

「もう私はこだわっていませんし、笑い飛ばせますけど、その通りです。私の若い頃は『田舎の社会人の審判は高校の先生より3倍努力してなおかつ運が良かったら(上級審判員になれる)』と色んな人がおっしゃっていました。審判になろうと思っただのは、中学2年生の頃、オフサイド・ルールの解釈をめぐって審判役の先生に疑問を呈して殴られたことがきっかけなんです。上級審判員になれなかった悔しさと、その最初の動機づけが長く続けてこられた原動力になったので、今では感謝してい

るくらいですけどね」

気持ちの整理は審判仲間の励ましもあってなんとか3カ月でつけられたが、35年間のキャリアの中で奥澤は一度だけ感極まって泣いたことがあった。

「93年の地元インターハイ(全国高校総合体育大会)のときですから、45歳のときでした。当時一級審判員が全国に116人いて、そのうちの21人が参加したんです。2000m(32秒以内)、50m(8秒以内)、12分走(2700m以上)の体力テストをクリアしたあとに、大会初日の蕪崎高校(山梨)と利府高校(宮城)の試合でもやの主審の割り当てがあったんです。その後は準決勝の線審もやらせて頂きました。JSLの線審を15試合やってはいますが、もし大きなミスがあったら年輪的にも潮時かなと思っていました。一級の夢破れても12年間精一杯頑張ってきたから、主審をやりながらも思う残すことはないという心境に達してしまっただけか、試合終了実際に涙でボールと選手が滲んで見えなくなっただけでほんとに困りました」

この話には奇遇めいたものがある。

「3-0で蕪崎が勝った試合でした。ときどき小雨の降るような天候でしたが、県総合運動公園サッカー場の芝は上々。フェアで気持ちの良い試合でした。その中に、2年生なのに3年生のキャプテンと同じように大きな声で指示を出してゲームを仕切っている7番の選手がいたんです。それが中田英寿でした」

48歳当時の2000試合、昨年11月4日の2500試合達成の模様については地元紙が大きく報じた。

現在の奥澤は関東社会人リーグでインストラクターを務めることが多い。長い審判生活で使った笛の数は意外に少なく、10/12年/数百試合分を同じプラスチック製の笛一つでまかした。黒のアクメ「サンダラ」が2代続いて、3つ目は同年代の高田静夫の爽やかな笛の音色の影響から小ぶりのアメリカ製「セロン」に変えた。

帰宅後の紐を外してからの丁寧な洗浄までなら想像の埒内だが、「試合の何日か前からコルクを水に漬けて湿らせていました」と語るあたりが、この人ならではの非凡さを表している。

(文中敬称略)

奥澤

の(公式戦審判2517試合までの道のり)を改めて眺めると、年間100試合以上務めた年が3度ある。とくに凄まじいのが1974年から75年にかけての2年間で、74年は主審82試合、副審(線審)43試合の計125試合を担当している。75年には主審94試合、副審36試合で、年間130試合。その年の7月には通算500試合を早くも突破している。

数字だけ見ると、三日と空けずという感じだが、実際は一日に3、4試合審判を務めたこともあったと言ふ。「やる気になればいくらでも割り当てられる時代でした。どんなレベルの試合でも審判できるのがレフェリーだと思つて、小・中・高、大学、社会人と選り好みせず担当しま

した。その代わり手当が1円も出ない手弁当の時代で、今のようには審判だけで暮らせる時代が来るなんてことは考えもしなかったですね」

23歳で2級審判になってから5年、76年に奥澤は栃木県協会と関東協会の推薦を受けて一級審判員候補に挙げられた。なんと上級審判員になって、地元で開催される80年「栃の葉国体」の笛を吹くことが当時の奥澤の熱き願いだった。

「75年からの3年間はまだ審判のために生活していても過言じゃないです。会社までの片道約8キロが徒歩で、帰りがランニング。悪天候でそれが出来ないときは、帰宅後、15から20キロのロードワークを課していました」

それまでも動いていた測量会社が倒産。新しい会社で東北転勤を拒